

第3章 基本的理念

首里城を復元整備するにあたって、沖縄における歴史の拠点、さらに伝統・文化の拠点としての背景を整理し、その復元整備の意義を位置づける。

1. 歴史の拠点としての首里城

1) 首里城の沿革

首里城は那覇の東方に位置し、西側に傾斜した琉球石灰岩の丘陵台地上にあって、この一帯は鬱蒼とした樹林に覆われ、断崖からは清泉が湧出していたと言われる。このような情景は、古代人にとって「神威の現れ」と見えたのか、これにまつわる神話や伝説が多い。その昔、アマミキヨとシネリキヨの神が降誕し数多くの鳥々を造らしめ、この神々が降りた場所が首里城内スイムイフサキの首里森御嶽、真玉森御嶽マダミミラであったとされている。

14世紀から三山鼎立時代が続いていたが、尚巴志は1416年に山北を滅ぼし、さらに1429年に山南を制圧したことで、ここに、統一王国（第一尚氏王朝）が成立した。しかし、この王朝の支配は必ずしも安定したのではなく、1469年、金丸かなまき（尚円）によって第一尚氏王朝は滅ぼされ、第二尚氏時代に入った。尚円の子、尚真は在位50年の間に首里城北側の拡張、諸制度の整備、道路の拡幅や新設などに力を注いだ。

1494年、尚真は尚円を祀るため円覚寺を建立、1501年には玉陵を築造し、1502年には円鑑池を造るなど、首里城周辺の整備を進めた。1509年には正殿前に石高欄及び龍柱を建て、中国の冊封使を接待する北殿を建造し、歓会門や久慶門を築造して、北側に外郭を拡張整備した。城外では園比屋武御嶽石門、城の東方の弁ヶ嶽の石門、首里城を起点とした真玉道またまみらを完成させた。尚真の子、尚清は父の業績を引き継ぎ、城の南東に外

郭を拡張し継世門を開いた。さらに、京の内の鬱蒼とした樹林の台地に石垣を積み、アーチ門を設けるなど霊域にふさわしい整備を行った。これら城郭の拡張整備は王城としての堅牢さや尊厳さ、壮観美を生み出すことが目的と考えられるが、琉球石灰岩上の雨水貯留をねらった総合利水計画であったとも言われている。

なお、首里城の中核である正殿については、1453年の『李朝実録』¹⁾によるとその頃すでに三層の建物であったと伝えられているが、創建年はまだ明確でない。その後、焼失・再建・修復を繰り返し、1945年の戦禍を受けた正殿は1712年頃に再建されたものである。その他北殿は1506～21年、南殿は1621～27年にそれぞれ創建された。これらの施設は、王府がたどったさまざまな時代背景と深く関わりながら、国王の居城として王府の中核施設として整備拡充がなされた。

さらに城外においても、王都にふさわしい尊厳と風格を備えた町として、道路の整備や社寺の建立、築庭、植林などのまちづくりが進められていった。

2) 旧国宝指定を受けた首里城内の文化財

戦前、沖縄県で旧国宝の指定を受けた文化財は23件にのぼる。首里城については正殿を始めとして守礼門、歓会門、瑞泉門、白銀門の5件、円覚寺については総門、右掖門、左掖門、放生橋、三門、仏殿、龍淵殿、鐘楼、獅子窟の9件、それに、園比屋武御嶽石門の合計15件が首里城周辺での旧国宝指定文化財であった。このうち12件は第二尚氏王朝の尚真王時代に建立されたもので、15世紀後半から16世紀にかけての海外諸国との盛んな交流により琉球独自の文化として開化したものであった。

表-1 首里城関連旧国宝

番号	名称	種別	指定年月日	備考
1	正殿	木造	大正14年4月24日	戦災焼失、1992年（平成4）復元
2	守礼門	木造	昭和8年1月23日	戦災焼失、1958年（昭和33）復元
3	歓会門	門石造・櫓木造	同上	戦災焼失、1974年（昭和49）復元
4	瑞泉門	門石造・櫓木造	同上	戦災焼失、1992年（平成4）復元
5	白銀門	石造	同上	戦災消失

1) 朝鮮李朝の歴代の記録をまとめた史書。琉球関係の記録も見られる。

2. 伝統・文化の拠点としての首里城

1372年、中山王察度は明の太祖洪武帝の求めに応じ初めて入貢し、以後琉球は中国との間に約500年におよぶ冊封・進貢関係を結んだ。これを契機に、琉球では中国の冊封体制の下で、外交・政治・経済・文化の営みが行われるようになり、また、東アジア・東南アジアとの交流も深くなっていった。

14世紀後半に開始された進貢貿易は、尚真王の時代に二年一貢から一年一貢へ改められ、以後貿易の拡大とともに明国の進んだ文物が多量に運び込まれて文化の形成に大きな影響を与え、この時期に独自の琉球文化を創造する土台が築かれた。

15世紀に入ると公貿易がますます盛んとなり、日本本土の代表的な貿易港を通じて、美術工芸品、日本刀などの日本産品を入手し、朝鮮や東南アジアからは人參、虎皮、香料、染料、錫、象牙などが運び込まれた。1458年に鑄造され、首里城正殿前に掛けられた「万国津梁の鐘」（沖縄県立博物館蔵）に記されているように、琉球は「舟楫を以て万国の津梁」（船をあやつって世界のかけ橋となる）の役割を發揮し、中国との太い通商ルートに加え、日本・朝鮮ルート、東南アジアルートなどの広域なネットワークを形成していた。

1609年（慶長14）、薩摩藩の島津家久は兵船をもって琉球を攻めてこれを征服した（島津侵入事件）。この事件以後の琉球は、内面的には薩摩の支配を受けることになったが、外面的には中国に対して冊封や進貢を続け、江戸幕府にも使節を送り、旧來のごとく独立国の体面を保った。しかし、戦禍の復興に半世紀にわたる歳月を要し、政治・経済・文化の面では前時代とは全く異なる様相を呈した。この間、中国では明朝が滅んで清朝の時代となったが、琉球は早くも1654年（順治11）に使者を遣わして世子尚質の冊封を乞い、1663年（康熙2）張学礼らが渡来し冊封の式典が行われた。入貢は二年一貢となり、その人数は約150人で、旧來の進貢の重要な物資であった瑠璃、烏木、降香、木香、象牙、錫など10件のものは、土産のものでないとの理由で進貢を免ぜられ、かわりに硫黄が主要な物となり、その他に紅銅や漆螺茶碗、芭蕉布などが献上されるようになった。

かくして清朝聖祖康熙帝の時代には、尚貞王（在位1669～1709年）の発展期がおとずれ、次いで雍正帝、乾隆帝の頃には尚敬王（在位1713～51年）の繁栄期が

現出し、芸能・工芸など文運が興隆した。琉球の音曲、舞踊には古い伝統があり、路次楽と呼ばれる中国音楽が導入されたが、玉城朝薫が新様式の組踊を創作した時を境に、音楽・演劇・舞踊は琉球独自の古典芸術として発展するに至った。

また、工芸について言えば、尚真王時代に貿易による富の蓄積がなされて舶來の高級な品物が容易に手に入ったため、工芸品の製作を奨励することはあまりなかったようである。しかし、状況は島津侵入以来一変し、以後の琉球は生活の必需品を基本的に自国で生産しなければならなくなった。また、工芸の水準を高め、製品を外国に輸出して財政を支えなければならない状態になった。ここにおいて、王府は積極的に外国の工芸技術を導入し、自国の職人を技術修得のため外国に派遣したりして、工芸の振興を図ったのである。

このような背景を持つ沖縄の工芸は、王府監督の下に上質物を生み、洗練度の高い製品を出すに至った。またその一方で、一般工人の質朴な手仕事で生産されるものもあり、おおらかで力強く暖かみのある製品を産み出した。したがって、沖縄の工芸は貴族工芸から民芸まで幅広い内容をもつ特色を備えている。しかもその中に、中国や東南アジア、日本本土や朝鮮などの技法が取り込まれ、これが沖縄の風土の中でまとめあげられて独自の風格を生んだのである。染織、漆芸、陶芸などが、日本本土の工芸ともまた一種異なる独特の風格と魅力を有するのは、上記の背景をもつからであると言われている。

以上のように、各国との公貿易や冊封式典、さらに各種工芸品の製作、芸能の創作などは首里城を中心に展開され、発展していった。

3. 首里城復元整備の意義

沖縄は、わが国の古い伝統の上に中国及び東南アジア諸国との活発な交流を通じて外来文化を学ぶとともに、自らの価値基準に立脚した独自の文化を発展させてきた。その歴史・文化の示す世界は、わが国の南の島々で展開された「もう一つの日本文化」であり、それはわが国の歴史・文化の枠組を拡大し、より豊かにする内容を秘めている。

首里城は、約450年にわたって琉球王国の「王宮」として、また「王府」としての機能をもった中枢施設であり、歴史上のさまざまな事象と深い関わりをもち、ここを中心に琉球の「王朝文化」は花開いたのであった。

首里城は、伝統的な文化を基礎に置き、日本本土や中国の建築様式を巧みに摂取して造営された城郭であり、彫刻や彩色と建築とがよく調和し、また城壁の石組にも独自の造形と高度の技術が発揮されており、琉球における建築文化の粋を集めたものであった。

以上のことから、今日首里城を復元整備する意義として次の点が挙げられる。

①貴重な国民文化遺産の回復

- ・首里城は、沖縄の歴史・文化の展開に根ざす独自の性格を持つ城郭であり、その整備はわが国における特色ある建造物を現代に蘇らせる事業となる。
- ・首里城は、沖縄最大の建築物であると同時に建築様式の粋を集約した文化的作品であり、その整備は沖縄の建築文化の到達水準を明確に提示する事業となる。
- ・首里城に関する資料の多くは戦禍などによって散逸し、各分野における首里城研究は大幅に立ち遅れており、その整備は首里城の歴史性と城郭様式の変遷を解明する契機を与える事業となる。

②新たな県民文化の創出

- ・首里城は、沖縄の歴史・文化の象徴であり、戦禍で文化遺産の多くを失った沖縄にとって、その整備は心豊かな県民性を培い文化思想の高揚に大きく寄与する事業となる。
- ・首里城の整備は、単なる過去の文化遺産の回復に留まらず、その実現に向けて共同・協力しあえる現代における創造的な文化活動の一環となる

事業である。

③伝統技術の継承と発展

- ・首里城の整備にあたっては、伝統的な技術体系の把握とさまざまな技術を駆使する必要がある、その整備は伝統的技術の把握・継承及び集積を実現できる機会を提供する事業となる。
- ・首里城の整備にあたっては、建築や土木、造園、歴史、美術、工芸、考古などの協力提携が必要であり、その整備はこれら多様な研究分野の発展を促す事業となる。

④歴史的風土探訪の場の形成

- ・首里城の整備により、特色ある歴史的風致が創出され、ふれ合いと理解を深める国民の風土探訪の場として、さらに諸外国との交流の場として沖縄県の振興に大きく役立つ事業となる。



図-1 首里城図 沖縄県立図書館蔵